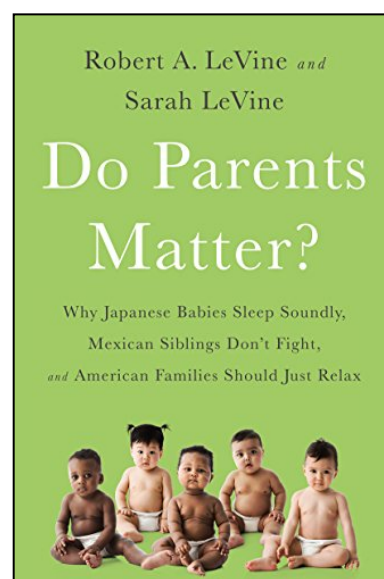


Robert Alan LeVine and Sarah LeVine, *Do Parents Matter? : Why Japanese Babies Sleep Well, Mexican Siblings Don't Fight, and American Parents Should Just Relax*, New York: PublicAffairs, 2016, 272p, \$11.55.

杉尾 浩規

本書『親の問題？——なぜ日本の赤ちゃんはよく眠り、メキシコの兄弟姉妹は喧嘩をせず、アメリカの親はゆっくりすべきなのか』は、現在のアメリカ（白人中流家庭）で支配的な養育スタイルを文化の多様性という視点から相対化することを目的とした比較文化研究である。著者のロバート・ルヴァイン（夫）とサラ・ルヴァイン（妻）は、共にグシイに代表されるアフリカ及びその他の地域での豊富な調査経験を有するアメリカの人類学者であり、その関心は一貫して養育の文化的多様性に向けられてきた。本書では、日本、メキシコ、アメリカの比較を連想させるサブタイトルとは異なり、これらの地域を含む多様な養育文化の現実が、著者らの調査経験及び民族誌に基づきながら子どもの発達段階ごとに紹介されている。

養育に関する本書の立場は「イントロダクション」における東アフリカのグシイと西アフリカのヨルバにおける子どもの比較に明瞭に示されている。ロバート・ルヴァインは、1950年代に初めてグシイとヨルバを訪問した際、3歳前後の子どもの対照的な行動パターンに遭遇した。グシイの子どもは彼を見て逃げ出し、恐怖のあまり泣き叫ぶ子もいた。そしてこの反応は親しくなるにつれて消えた。他方、ヨルバの子どもは、グシイの子どもと同じく見知らぬ訪問者の経験がないにもかかわらず、初めから楽しそうに彼につきまとうた。このような違いは「先行する社会経験」(p. xiv)の違いから解釈される。例えば、グシイでは母子が居住単位となり、訪問者はまばらだった。対して、ヨルバでは複数の母子が居住空間 (a compound) を共有し、頻繁に誰かが訪れていた。また、グシイとヨルバの赤ん坊は姉や兄などに世話される点では同じだが、ヨルバの赤ん坊は成人女性からより頻繁に世話されていた。「それゆえ、ヨルバの同年代の子どもと比較してグシイの子どもが相対的に孤立していることが、見知らぬ大人に対するより大きな不安と恐怖の原因であるように思われた」(p. xv)。加えて、「控えめさ」(グシイ)と「社交性」(ヨルバ)という対人関係の文化的パターンの影響もある。「アフリカの二つの農耕民は、見知らぬ人を含む大人に対してどのように振る舞うべきか、そしてより広義には子どもに社交性を促進させるべきか妨げるべきかという、子育てにとって基本的な点で異なる」(pp. xv-xvi)。このよ



うに、本書の分析枠組みである養育文化の多様性という視点は、養育が文化的営みでありそれに応じて子どもの発達経路も文化的に多様であることを意味する。

養育文化の多様性という視点からアメリカの養育に注目する本書の意図は、現在のアメリカで広く自明とされている「アメリカの子どもの精神衛生は「鈍感な (insensitive)」赤ん坊の世話によって危険に晒されているという仮定」(p. xxi) を相対化し、「多様な条件下における子どものレジリエンス (resilience) は、多くのアメリカの親が信じている情動的な傷つきやすさ (vulnerability) よりもはるかに明白である」(p. xxi) ことの主張にある。それゆえ、本書は「子育ては文化的に多様であり、子どもには柔軟な適応力が備わっているのだから、それほど神経過敏になる必要はありません」というアメリカの親へのメッセージが込められた育児本という捉え方も可能であろう。しかし、本書の真の関心は、現在のアメリカの養育における自明性を支える「精神医学的パースペクティブ」(p. xxi) であり、その真の狙いは、科学と称しながら「道徳的イデオロギーを経験的証拠に混ぜ合わせる」(p. xxi) ことによりその種のパースペクティブを強化する専門家集団への批判にある。この際、とりわけ著者らの念頭にあるのは、第1章で明記される通りボウルビイ (John Bowlby) のアタッチメント理論である。つまり、本書は、アタッチメント理論を養育文化の多様性という視点から批判する学術的試みとして捉えることができる。現在活発化しているアタッチメント理論の普遍的妥当性に対する文化的関心の高まりの形成に大きな役割を果たしてきたのがロバート・ルヴァイン (e.g., LeVine 2014) であることを考慮すれば、その種の関心の形成が待たれる日本において本書を紹介することは有意義であると評者は判断した。以下では、本書の内容を章ごとに要約し、最後に評者のコメントを手短に付する。

第1章「アメリカにおける親への非難 (Parent-Blaming in America)」では、19世紀後期から現在のアメリカにおける養育特徴が1950年代を目安としながら前後二つに整理される。1950年頃までの養育は「衛生 (hygiene)」というキーワードで示される。この時期、公衆衛生の改善に向けた行政の取り組みが拡大し、家庭の衛生管理が母親に委ねられた。そして、養育は子どもの疾患予防を目標とした「母親が医療専門家の提供する情報を利用することにより解決可能な一連の医学的問題」(p. 5) になった。この結果、19世紀的な「ロマンチックでセンチメンタルな母子関係」(p. 7) を象徴する母性愛はホルト (Luther Emmett Holt) などの小児科医を中心とした専門家の科学的助言に否定された。著者らはこのような医学的助言に含まれる道徳的評価に注目する。例えば、この時期の小児科医は、親によるキス、子どもの指しゃぶりや爪噛みなどを、疫病感染のリスク要因として禁止した。しかし、そこには「子どもが「悪い癖」を形成する誘引となる親の弱さと「寛大さ」の印としての愛情を検閲するという、強い道徳的ニュアンス」(p. 7) が伴っていたことが指摘される。対して、1950年代以降の養育は「精神衛生 (mental health)」というキーワードで示される。この時期、子どもの死亡率の減少に代表される公衆衛生の改善により、養育の目標は子どもの情動の安定性へと変化した。1940年代に始まるこの変化は、小児科医スポック (Benjamin McLane Spock) が『スポック博士の育児書 (*The Common Sense Book of Baby and Child Care*)』(1946年) で示した親の愛情への肯定的評価を転換点とした。1950~60年代を中心とするこの変化の担い手は精神科医や心理学

者などの「精神衛生」専門家であり、子どもの情動の不安定性及び精神疾患の原因として母親が非難された。これは科学性を帯びた母性愛によって「良い母親」と「悪い母親」が区別されたことを意味する。これらの専門家が依拠した理論はその後に科学的妥当性を問われた。しかし、その影響は現在の精神衛生理論にまで続き、「それらが母親たちに蔓延させた恐怖——母親の世話が永続的な損害を子どもに与えるかもしれないという恐怖——は何世代にもわたる母親たちに長期的影響を及ぼした」(p. 21)。著者らは最も強い影響力としてアタッチメント理論を位置づける。そして、生後 12 ヶ月間に母親の「鈍感な」養育を経験した子どもは情動的に不安定な成長を遂げるというアタッチメント理論の想定を、母親の影響力の誇張であり母親の養育負担の強要であると批判する (pp. 23-27)。

第 2 章「おめでた——妊娠と出産 (Expecting: Pregnancy and Birth)」では、人間の生殖プロセスにおける文化的多様性が検討される。この多様性は、妊娠と出産という生物学的事実に関する象徴的意味及びそれが喚起する情動の文化特異性が、世界規模で拡大する科学的医療と種々の具合で混ざり合うことの結果とされる。論点はこの多様性の評価に関わり、生殖プロセスの文化的多様性と科学的進歩の関連が三つの地域集団における逆子(骨盤位)を通して検討される (pp. 39-42)。ボツワナのクンサンでは、出産はブッシュで母親がしばしば独りで行き、逆子はその場で埋められる。ケニアのグシイでは、逆子の出産は夫の祖先による災いの前兆であり、母子を隣人の潜在的悪意に晒すとされる。そのため、母子は家の中に隔離され、夫が儀礼を遂行するまで母親が子どもを抱きかかえ授乳を繰り返すという「カンガルーケア」的状况に置かれる。中央アメリカのマヤでは、女性助産師が胎児の状態を判断し、逆子ならば母親の腹部をマッサージすることでその姿勢を整える。著者らはこれら三つの実践を「進歩」という尺度で評価することの危険を指摘する。それは、逆子を殺す以外に方法を知らない「未開」段階、早産で虚弱なことが多い逆子を保護する「より進んだ」段階、逆子の出産を予防するという「最も進んだ」段階、という捉え方である。なぜなら、食料採集に従事し四年間隔で出産するクンサンの女性にとって、生存の見込みに基づく子どもの選別は適応的と言えるからである(長期にわたる養育投資はその見返りの確実度がより高い子どもを求めるだろう)。あるいは、マヤの助産師は生まれながらの聖なる職種であり、その逆子予防は科学的医療の知識に基づく実践ではない。このような議論を通して、人間の生殖プロセスにおける文化的多様性は科学的尺度で評価し尽くすことができない現実性を有することが確認される (p. 44)。

第 3 章「赤ん坊を世話する——たくさんの質問と幾らかの答え (Infant Care: A World of Questions... and Some Answers)」では、授乳と睡眠の文化的多様性が検討される。ドイツの化学者リービヒ (Justus von Liebig) が 1867 年に考案した粉ミルクは、西洋における赤ん坊の養育に大きな影響を及ぼした。例えばアメリカでは、粉ミルクは母乳に代わる授乳法として急速に普及し、この状況は 1960 年代まで続いた。著者らは、この時期の多くの母親が母乳を与えることに恥ずかしさを感じ話題にすることすら避けていた点に注目する。そこから、この普及の受け皿を働く母親の増加(女性の社会進出)ではなく性をタブー視する十九世紀後期のヴィクトリア朝文化の名残として位置づける (pp. 51-54)。また、1970 年代に始まる母乳育児への回帰には「母親と赤ん坊の愛情と相互作用」(p. 55)を強調する「精神衛生」専門家による科学的助言の影響が指摘される。赤ん坊の睡眠に関

しては、アメリカにおける独り寝が日本を典型とする非西洋諸社会で一般的な添い寝と比較される。アメリカの親は、添い寝に伴う赤ん坊の「生存」と「精神衛生」の危険という小児科医や精神科医の科学的助言に従い、赤ん坊を別室で独り寝させる。その結果、夜泣きのたびに子ども部屋まで行き熟睡できない。筆者らはこの種の専門家による助言の妥当性を問う。生存のリスクに関しては、日本における一歳未満の死亡率及び乳幼児突然死症候群 (Sudden Infant Death Syndrome: SIDS) 率の双方がアメリカの率よりも相当低いことが指摘される。精神衛生のリスクに関しては、人類学者コーディル (William Caudill) が1960年代に実施した日本の添い寝研究が引き合いに出される。コーディルは添い寝が日本における母子間の心理的相互依存を促進すると考えた。しかし、「彼が主張したことは、そのような相互依存は病的ではなく文化的であるということ——つまりそのような相互依存は日本の文脈においては正常であるということ」(p. 63)である。著者らは、独り寝を「親を苦しめ疲労困憊させるが子どもの安全性と将来の性格形成を保証することのない、欧米的な文化実践」(p. 64)であるとする。

第4章「母親と赤ん坊——向かい合う？それとも触れ合う？(Mother and Infant: Face-to-Face or Skin-to-Skin?)」では、母子間情動表出の文化的多様性が検討される。西洋における母親と赤ん坊の相互作用は、視線、微笑み、語りに代表される情動表出を媒介とした対面的な営みを中心であり、その目標は母親が刺激を通して赤ん坊からポジティブな情動を引き出すことに置かれる。対して、グシイのようなアフリカの農耕社会における相互作用の中心は身体接触にあり、その目標は母親が身体的欲求を適切に満たすことによって赤ん坊のネガティブな情動を抑制することに置かれる。著者らは、このような情動表出の違いの由来を発達経路の文化的違いに求める(pp. 69-73)。「例えばグシイの人々が望むのは穏やかな赤ん坊と従順な子どもであり、この目的を達成するために落ち着かせることを利用する。他方で、アメリカの人々が望むのは情動的に関与し、活動的で、独立した子どもであり、この目標へ向けて赤ん坊を刺激し駆り立てる」(p. 73)。そして、発達の文化的経路という視点からアタッチメント理論に対して疑問を呈する。グシイの母親は赤ん坊のネガティブな情動以外のシグナルには極度に鈍感である。母親の「敏感な」養育が赤ん坊の安定したアタッチメント(情動の自己制御)を促進すると考えるアタッチメント理論に従えば、これは不安定なアタッチメントの促進要因とされる可能性がある。しかし、著者らは「我々自身の文化のパースペクティブによって歪められた結論に飛びつくよりも、母親の感性にはアタッチメント理論において想像されてきたよりもあるいは子どもの発達研究者によってとらえられてきたよりも多くの種類があると考えたい」(p. 83)と述べる。ただし、対面によるポジティブな情動表出のやり取りは西洋に限定されるのではなくアフリカの狩猟採集社会や西アフリカの農耕社会にもある(pp. 78-80)。本章の論点は、「向かい合うこと」と「触れ合うこと」という母子間情動表出の違いが文化的多様性の中で評価されなければならないという点にある。

第5章「子どもの世話をシェアする——ママじゃ足りない(Sharing Child Care: Mom Is Not Enough)」では、養育の担い手の文化的多様性が検討される。民族誌に従えば、赤ん坊の養育は親族集団による協同での営みが普通である。例えばインドの合同家族では祖母やおばなどの成人女性が協同養育者として重要な役割を演じ、赤ん坊の加齢と共に養育の

比重は母親からこれら協同養育者へと移る。インドの養育ではアメリカの母親の養育特徴である語り、キス、ハグなどのポジティブな情動表出が豊富に見られる。しかし、著者らは、これらが身体接触や添い寝などの非西洋的な養育特徴と共に「相互依存」という発達の文化的経路の中で活用されている点に注意を促す。アメリカではポジティブな情動表出を伴う相互作用は子どもの独立のために活用される。対して、母子関係が階層的な社会秩序の基本単位という側面を持つインドでは、母親が、ポジティブな情動表出を通して子どもの相互依存関係を促進すると同時に、その中に上下関係を持ち込むことが特徴的とされる (pp. 94-97)。他にも、本章では、協同養育者としての「子ども」と「父親」及び協同養育システムとしての「里親」と「養子縁組」に関する考察が注目される (pp. 100-102)。以上から、著者らは母子二者養育関係を子どもの情動発達の基盤とする発達心理学の妥当性を問う。協同養育が子どもに及ぼす心理的影響は病理的なのか。それとも情動発達の安定性の増大なのか。後者ならば、「これが意味するのは、これらの [養育における] 違いを知らない西洋の心理学者によって示される心理学的概念は結局のところ普遍的ではないということなのか ([] 内引用者)」 (p. 104)。

第6章「よちよち歩きの子どもをしつける——おしゃべり、排泄、かんしゃく、仕事 (Training Toddlers: Talking, Toileting, Tantrums, and Tasks)」では、歩けるようになった子ども (Toddlers) の学習経験としつけに関する文化的多様性が検討される (この期間は歩き始めから 3~5 歳頃までとされる)。愛情溢れる赤ん坊時代の母子二者関係に支えられながら子どもは個として自律的に発達するという想定が好まれるアメリカでは、学習経験のイニシアチブは子ども自身にある。しかし、著者らは、心理学者ロゴフ (Barbara Rogoff) に従い、この時期の子どもが経験する学習状況を「ガイド付きの参加 (guided participation)」として一般化する (p. 108)。「ガイド付きの参加」は身近な他者の導きによる文化的現実への参加であり、子どもの学習経験への文化による積極的関与という意味における「しつけ」である。「しつけ (ガイド付きの参加)」は養育環境に応じて文化的に多様な表現を持つが、農耕社会では階層的対人関係の文化的パターンに関係するのが一般的である。その具体例としてサラ・ルヴァインが調査をしたメキシコ農村部のある家族が示される (pp. 112-113)。その家族は母親と 17 ヶ月から 13 歳まで計 7 人の兄弟姉妹からなり、父親は出稼ぎで不在だった。母親の関心は専ら 17 ヶ月の末娘に向けられたが、他の子どもたちはこの末娘を中心とした仲の良い関係にあった。この関係は母親の愛情に起因するものとして解釈される。ただし、それは母親が全ての子どもと形成する愛情関係ではなく (これは母親を巡る子どもたちのライバル関係の可能性を孕む)、母親が愛情の対象を新しく生まれた子どもに順次置き換える関係として捉えられる。それ以来、「置き換えられた子どもが激しく忙しい母親から同意を得ることができる唯一確かな方法は、今現在彼の地位を占めている赤ん坊に優しいことによってであった。家族という「チーム」の正式メンバーになるために、彼は忍耐と思いやりを学び自分の「あとから来る人」に喜びを見出さなければならなかった」 (p. 113)。本章では、この時期の子どもの学習経験の文化的多様性が「おしゃべり」、「排泄」、「かんしゃく」、「仕事」を事例としながら示されている。

第7章「児童期——学校、責任、支配 (Childhood: School, Responsibility, and Control)」では、5~10 歳頃の子どもにおける学習経験の文化的多様性が検討される。アメリカ (西

洋)ではこの時期の子どもの主要な活動領域は家庭から学校へと変化する。対して、伝統的な農耕社会の子どもは技術とそれに伴う責任を家庭で身につけるのが普通であり、これは都市化や西洋由来の学校制度が強い影響を及ぼす場所でも当てはまる。特に著者らはこの時期の子どもの発達における文化的経路に関して「赤ん坊の世話」に注目する。なぜなら、これは農耕社会の親が子どもに対して最も一般的に期待する仕事であるのとは対照的に、アメリカでは親が自らの短期的利益のために子どもに課す不適切な重荷とされるからである(pp. 140-141)。例えば1950年代のグシイでは、母親が忙しいときの赤ん坊の世話は6~8歳頃の姉に任された(家族に姉がいない場合は兄が世話した)。アメリカを基準とした場合、これは女の子への過度な(違法な)責任の押し付けとなる。しかし、著者らはこの時期の子どもにはそれまでの養育の影響が反映されていることに注意を促す。それゆえ、「グシイの女の子は6歳までには著しく異なっていた。彼女たちは、おもちゃなどの私的な持ち物を所有することなく従順な赤ん坊とよちよち歩きの子どものとして成長してきたので、家族の関心とは切り離された私的な関心を持たなかった。彼女たちの関心の大部分は母親が彼女たちに定めたものであり仕事を行うことに関係していた。確かに彼女たちは赤ん坊を世話するよりも遊びたかったかもしれない。しかし母親による仕事の割り当てを最優先するよう学んできたのである」(p. 143)。1970年代半ば以降のグシイではこの時期の子どもの通学が定着した。しかし、姉は赤ん坊を世話することを期待され、世話は十代を含む姉たちによる分担制へと表現を変えながら続いた(p. 144)。他に、本章では、子どもに課される仕事との関連で体罰が論じられていることも注目される(pp. 160-162)。

第8章「早熟の子ども—親とそれ以外の人々による文化的呼び水(Precocious Children: Cultural Priming by Parents and Others)」と第9章「結論(Conclusions)」では、これまでの議論を踏まえながら親(及び周囲の大人)の養育が子どもの発達に及ぼす効果が確認される。第8章は効果の「多様性」を焦点とする。養育の文化的多様性は、特に第7章のグシイの女の子の事例に示される通り、子どもの発達の文化的多様性を現実を引き起こす。著者らはこれを子どもに反映される「早熟さの文化的パターン」(p. 170)と名づける。そして、子どもを文化的早熟さへと導くために養育が果たす役割を「呼び水」として捉える視点を提供する。「親は、自分たちの赤ん坊やよちよち歩きの子どもの支配力を利用しながら、子どもたちがコミュニティの文化的慣例に参加するための呼び水となるのである」(p. 180)。第9章で焦点となるのは効果の「持続性」である。民族誌は親の養育が子どもに及ぼす強い効果を支持する証左となる。しかし、同時に著者らは、その効果の持続性を長期にわたるものとして想定することに疑問を呈し、その評価が更なる経験的調査に委ねられる必要性を強調する。そして、愛情溢れる敏感な母子二者関係を正常な発達のスタートラインとして想定し、そこから逸脱した養育経験を子どもにとって「有害的」「トラウマ的」「虐待的」とする西洋の精神医学に対して、子どものレジリエンスという代替的視点を提案する(pp. 188-189)。「子どもはその種の専門家が我々に話してきたほど[親の養育に対して]敏感ではないし、他の文化の親は最初にそう見えるほど自分の子どもの幸せに鈍感なのではない([]内引用者)」(p. 189)。

以上、本書の要約を示した。最後に手短なコメントを述べたい。本書では、著者らの調査経験と多様な民族誌を通して養育文化の現実が巧みに手際よく示されている。しかし、

これだけで本書を評価すべきではない。なぜなら本書はその種の多様性の提示が現実的効果を持たないという著者らの強い問題意識によって成立しているからである (pp. xi-xii)。ミード (Margaret Mead) は『マヌス族の生態研究 (*Growing Up in New Guinea*)』(1930) で多様な養育文化を学ぶ必要性を説いた。それ以来養育文化の研究が蓄積されてきたが、同時に「他の文化における親の実践に関して激しい非難から称賛にわたる軽率な見解があまりにも多くなされてきた」(p. xii)。著者らはこのような経緯を踏まえ「更に深く」(p. xii) 養育の実践を調査する必要性を説く。アタッチメント理論を精神衛生理論の代表と位置づけ、それを養育の文化的多様性に対峙させるという構図と、養育環境からの影響に一方向的に晒されるのではない子どもの適応能力としてのレジリエンスという視点が、著者らのこのような問題意識の反映であることを理解しなければならないだろう。レジリエンスという考えは本書ではアタッチメント理論の代替的アイデアとして提案されるに留まっているが、人間の文化的発達を捉える一つの立場として研究の発展が期待されるだろう。それを踏まえた上でここでは一点だけ指摘したい。それは本書におけるアタッチメント理論の取扱いに関係する。特に第 1 章の記述からは、アタッチメント理論が「生後 12 ヶ月間に経験する母親からの敏感な養育の有無が子どもの情動発達に長期にわたる影響を及ぼす」という単純な想定に基づいた発達論として読み手に伝わる可能性がある。しかし、このような発達論に依拠するアタッチメント研究者が現在どれだけいるのか疑問である (e.g., Cassidy & Shaver 2016)。ロバート・ルヴァイン (LeVine 2014: 59) 自身が別の所で述べる通り、現在のアタッチメント研究は、本書が批判する母親の養育の敏感性やその影響の長期にわたる持続性という論点を含めて豊かで多様な展開を示している。例えば本書が提案するレジリエンスという視点もまた、アタッチメント理論との関連で捉えることが可能かもしれない (e.g., 遠藤 2016)。

言うまでもなく、このような指摘は本書を否定することを意味しない。その意図は本書の学術的背景を強調することにある。本書の適切な評価にはアタッチメントと文化を巡る現在の研究動向を明確に意識することが必要不可欠であると思われるからである。さもないと、アタッチメント理論は養育文化の多様性研究によって置き換えられた、という誤解が生じる危険がある。評者は人類学を人間探求の学問的営みと理解している。そして、発達 (個体発生) という視点は人間探求の要の一つであると考えている。この意味において、アタッチメント理論という強い影響力を持つ発達論に対して文化研究がその普遍的妥当性を問うという (e.g., Keller & Bard 2017, Otto & Keller 2014, Quinn & Mageo 2013)、アタッチメントと文化を巡る現在の研究動向への関心が形成されているとは言い難い日本の現状は、不満であると同時に不思議でもある。本書評が日本の人類学におけるアタッチメント研究への関心を喚起する一助となることを希望する。アタッチメントの文化研究に関する現状と展望に関しては拙稿 (2018) を参照されたい。

参考文献

(日本語文献)

遠藤 和彦

2016 「アタッチメントとレジリエンスのあわい」『子どもの虐待とネグレクト』第17巻3号: 329-339。

杉尾 浩規

2018 「アタッチメントの文化的性質——アタッチメントの文化研究の動向と展望」『社会と倫理』第33号: 135-160。

(英語文献)

Cassidy, J. & Shaver, P. R. (eds.)

2016 *Handbook of Attachment: Theory, Research, and Clinical Applications* (3rd edition), New York: Guilford Press.

LeVine, R. A.

2014 “Attachment Theory as Cultural Ideology,” In H. Otto and H. Keller (eds.), *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*, pp. 50-65, Cambridge: Cambridge University Press.

Keller, H. & Bard, K. A. (eds.)

2017 *The Cultural Nature of Attachment: Contextualizing Relationships and Development*, Cambridge: The MIT Press.

Otto, H. & Keller, H. (eds.)

2014 *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*, Cambridge: Cambridge University Press.

Quinn, N. & Mageo, J. M. (eds.)

2013 *Attachment Reconsidered: Cultural Perspectives on a Western Theory*, New York: Palgrave Macmillan.